

「大正2年山口県統計書」 (左) (米光家文書58) (右) (米光家文書57)

統計を考える 「山口県統計書」の世界

《数値で社会を描く》

統計の意義、それは、数値を用いて、さまざまな角度から対象をみつめ、その実相を認識することにあります。

県内の社会活動や経済活動のうつりかわりを追跡するにあたって、統計データは便利で欠くことのできない貴重な情報であることは言うまでもありません。多種多様な調査項目を設定することにより、地域の現状をクリアに把握できます。さらに、データを用いて、他地域と比較することにより、地域の独自性を明瞭にすることも可能です。そして、弱点や問題点を把握分析することにより、地域の目指すべき「未来予想図」を描くことができるのです。正しく導き出された統計数値はそのため有効なツールなのです。

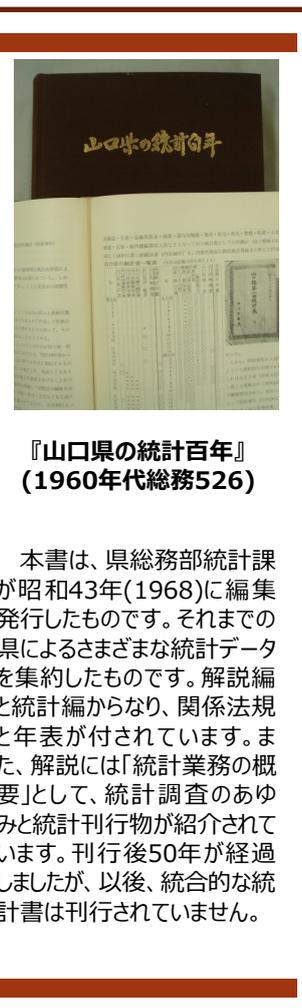
《統計のワナ》

統計数値の分析にあたって、まず注目されるのは、「ほかよりも突出している」ということであり、それが自らのストロングポイントとして認識されることとなります。ところが、

が、一歩間違えば、自らの優位性を誇示することだけに終始してしまう危険性と背中あわせなのです。統計数値は、ターゲットの絞り方や情報の組みあわせ方によっては、恣意的な操作が可能であるという一面を持ち合わせていることは、統計数値に接するうえでの大切な留意点です。

統計に潜むもうひとつの大きなリスク、それはランキングの功罪です。ランキングの上位であることが喧伝されすぎてしまい、「全国〇位」に位置するということが常に前面に押し出されることになってしまうのです。そして、ランキング下位に位置するものが、必要のないものとして無条件に否定されたり、切り捨てられたりしてしまうことがしばしばです。数値により示された現状を冷静に受けとめて、次につながる有効な手立てを熟慮することが肝要と思われる。

生産物の統計を例にとってみると、主要な農産物である米や麦、近代日本のドル箱であった生糸、近代的な生産技術にうらうちされたセメントや化学肥料、こうしたきらびやかな「近代オールスター」の生産量・



『山口県の統計百年』
(1960年代総務526)

本書は、県総務部統計課が昭和43年(1968)に編集発行したものです。それまでの県によるさまざまな統計データを集約したものです。解説編と統計編からなり、関係法規と年表が付されています。また、解説には「統計業務の概要」として、統計調査のあゆみと統計刊行物が紹介されています。刊行後50年が経過しましたが、以後、統合的な統計書は刊行されていません。

流通量・生産額には熱い視線が注がれます。

しかし、日常生活のかたわらに溶け込んでいた、食膳の沢庵や用水路の土管について、「全国第〇位」のような認識が求められることはまずなかったものと思われます。ちなみに、大正2年(1913)の「工産物価額(鉱産物を含む)」のトップは酒。2位石炭の3倍以上。この事実をもってして、酒が山口県の代表的な工産物と言われることはありませんでした。むしろ山口は「代表的な石炭の産地」との声価を獲っていたのです。

そして、皮肉なことに不景気に世の中が覆われはじめると、ランキング下位やランキング外の物産への注目が集まる傾向が見受けられます。「オンリー・ワン」、つまり、特産品や有力な副業品として脚光を浴びるのです。実際に、昭和に入ると、沢庵(大根)は、山口県にあっても徳山や吉敷郡南部を代表する産物としての声価が高まり、生産が奨励されました。今日にあっても「地域ブランド創出」の旗印のもと、通常のランキングでは意識されることがなかった産物が生産量の多寡に関係なく「特産品」として激賞されることは少なくありません。

こうした事例に気がつく、ひとびとの実感と役所が創りだす統計数値の世界観との乖離、「統計のわな」「統計のもたらすいたずら」を意識することの必要性を感じずにはいられません。統計数値は現状を押し量る重要なツールであることに変わりはありませんが、経済優先の現代社会が生み出してしまった水先案内人なのかもしれません。

世の中には数値化できない(数量での表現が難しい)、表面化していないものもたくさんあります。数値を鵜呑みするのではなく、行間ならぬ数値を演出している世界観を慎重に読み解く、という利用する側の才覚が問われているのかもしれません。



《山口県の統計刊行物》

近代国家の象徴として、行政による統計刊行物の作成は不可欠な要件となります。山口県においても、県庁統計掛により「山口県第一回統計表 明治15年」(明治18年5月刊行、戦前A総務525)、「第二回統計表 明治16年」(明治18年8月刊行、戦前A総務526)、「第三回統計表 明治22年」(明治24年刊行、戦前A総務527)が相次いで作成され、その数値は内閣刊行の「帝国統計年鑑」に反映されることとなります。

また、特定分野ごとに「府県物産表」「全国農産表」「農商務統計表」「農事調査表」などの全国統計に連なる統計が作成されたほか、「学事年報」「勸業年報」「衛生統計書」「警察統計書」などが作成されています。

大正に入って、各種の統計をまとめた「山口県統計書」が刊行されます(戦前は明治45年・大正元年～昭和16年まで)。この「統計書」は、年ごとに、第一編(土地戸口其他)、第二編(学事)、第三編(勸業)、第四編(警察及衛生)の4冊で構成されていました。

大正2年版「統計書」には、各編それぞれの巻頭に「統計図」として、象徴的な統計について視覚的にわかりやすく親しみやすい図解が載せられています。数量的なボリュームが、山の高さや工場の煙筒からはき出される煙の量などで表されています。この統計書が作成刊行された大正4年は大正天皇即位儀式の時期と一致します。統計書も例に漏れず世の中の祝賀ムードにつつまこまれていたということなのかもしれませんが、気運が高まりつつあった国勢調査実施に向けて、数値に対するひとびとの関心をたぐりよせる意図があったことも否めません。

昭和初期に山口県知事官房統計係が刊行した「統計上より見たる山口県の地位」、その序文には「統計は社会の鏡である、無言の雄弁である」と記されています。正しい統計数値に基づく分析を経た時宜にかなった政策の遂行が行政の原点であることは言うまでもありません。

